

〔六·一八〕余話

下の政治情況の分離化を。我々は個別の
中の政治の負荷として受け止め、その過
中からの反撃を可能限度一杯に試みた
た算定である。覺醒性を主張する民族性
とは元々主義矛盾であるが、それを承認
の上で最後の政治意識として努力を費か
んとしてきたのである。そこで我々の
最低限の原則は、人間の為せ事全じて我
に関心在らざるは無しとのマルクスの言
をもじれば、情狀的政治の今手で我々に
與われり、火中で栗を拾わんといふ位の
ものである。この原則を対外・対内関係に
おいて実践することは、政治的相対化、
党派政治の止揚への、党派の個々の路
路であると考えた。例を挙げれば、六・一
八三上個人集会への我々の対応は、事
前に、会場内において、まだ那須前
導者等に対しても種々の攻撃を喚起し
ている。我々は、三上グループの分派過
程を経て分派的挑発に対し、心的とは見
派を組んでいた限り各自の立場を拘われ
ずやらざるを尊ぶがての同志との闘
いとして、政治的には構築的公開的に
突き出すべき七十年代後期の政治思想的
対立の端緒として、六・一八の情況に原
則的に関わったし、全くのアクション
を引き受けたと開明してきた。集団の中
の一員としての私たる事態は過少ともい
過大にも評価していいな自感を持ってい
るが、六・一八以前にまで至る「那須
派」における牧歌的政治の解体に対し
て、心的愛護を含めて現在思う所を少々
述べてみようと思つ。

紙の報告)に対して現出したり、身近な友達ほど三ヶ月アーチの右側の上半部は政治的、思想的、実業理念と主張の差異や、三上の六段階的抗争の明確化を主張を有して、一八規定が我々への挑発なのか、それに対する、消極的対応かの批判。我々が参加したから誤認したのか、断留権を含めての我々への抗争の原因論議等が、当事者が熱心でなく、声は主觀的、心情的、失禮感を除く、あるいは拘らず自らと違ひのものによつて、報告の左側の上半部は政治的、思想的、実業理念と主張の差異や、三上の六段階的抗争の明確化を主張を有して、一八規定が我々への挑発なのか、それに対する、消極的対応かの批判。我々が参加したから誤認したのか、断留権を含めての我々への抗争の原因論議等が、当事者が熱心でなく、声は主觀的、心情的、失禮感を除く、あるいは拘らず自らと違ひのものによつて、

の根本問題は、ひどいに本筋が年々
身で触れたりする共同的格好とも、小数の集団員と、不相応な
しての執筆の壁であり、ふだんに、數の友人、支持者、注目者とい
情報を取扱選択し、コントロールする。旧来よりの「叛旗」潮流のゆる
規範についての困難である。組織やかな構成よりすれば、おおむね
文書が官僚的文体を、事務報道が自らの墓穴を掘ったかのうつて
主觀的文体を強いるられる。この情
指導者三上治の振舞いも、また三
況の中の政治（共同性、集団性）
の密閉化圧力を我々を覺えてこら
といふことの體現の上に、必ずしも
にかかる。どうよろしく、ひどく程
した我々の登場も共通の友人達の
外側から見た内なる「叛旗」像が
度風穴を開け得るかを問はず
ればよいのだ。

だが、六・一八情況（やまびこ）
したが、三上や私の世代幅での
か。
しかし、三上や私の世代幅での
か。
しかし、三上や私の世代幅での
か。

論文は抑制的な態度で述べたが、その間に別に書いた序文で、その間の公開された筆者による見解を述べて、逆に、我々と三上ダルーハとの間の公開的、大衆内、外に情況の現出に対し、いわゆる報道潮流全体との共通的筆致の報告は、資料を駆使しての友人達に心情的連帯基礎の喪失の報告姿勢の背後から三上ダルーハの確説を強いたのである。

二、三面の下コラムにて、一八・一九、いわゆる報道潮流全体との共通的筆致の報告は、資料を駆使しての友人達に心情的連帯基礎の喪失の報告姿勢の背後から三上ダルーハの確説を強いたのである。

三上ダルーハへの筆者の心情的異和がオーバーラップして透けて見えるといつ叛派の個人も、吉本氏を單独ものである。我々は別に建前で本音を使ひ分けている訳ではない。しかし聴衆もまた十人十色に事態をつまり、一面論文も本音なら、受容し、また参加したとの六、一、二、三面下コラムの事実経緯八局面の基底にも、右の心情的通風孔の不在が貼り書いていたところを読むのはなし。

ただ、ソレ浮上してくる表現言えるのだ。

た一時代は疾うる音を去ってしまった。知的闘争の頂点に在った帝王の學としての政治は、理想的側面を外され、共同性と集団性的の背離に架空化してしまった。与観察からヒーナツ・ソシエトによる構造改革的実利政治と、他方で内閣バと連携するに象徴される成算なき密室的政治の現

心の内ゲバ情況

政治領域と時代経験

